

五 日本無政府共產主義者連盟の結成

久し振りに二見が訪ねて来たのは、一九三三年の十月末か、十一月のはじめであった。のちに植村が真木泉の名で「自由連合」に発表した回想記「黒旗は破れた！」によると、昭和八年（一九三三年）十一月の中頃に、二見の訪問を受けたと書いている。とすると、二見は私を訪ねて来てから植村を訪問したことになるが、その前後のことはさだかではない。私の記憶が間違っている、十一月の中頃だったのかもしれない。私はその頃、東中野のアパートに住んでいた。

彼は、この前会った時話しあったことをいよいよ始めようと思う。実はあれからこれと思う同志を訪ねて歩いたが、自分が会った人達はみんな一応は賛成するけれども、積極的に先に立ってやろうとはしないので、まずボク達で団体をつくって、それに順次加わって貰うようにするより方法がないように思うがどうだろう。最初はほんの少数で集まってよく研究してつくろうと思うので、今日はその人選を相談に来たのだ、と言った。

「そうだろうね。捕まれば治安維持法でやられるだろうからね」と言うと、彼は「そうだ」と言っ
てゲラゲラと笑った。

彼は植村と入江汎は賛成すると確信あり気に言った。私も異論はなかった。

「行動的な人、行動出来る環境にある人を選びたい。思想的には立派な人でも、行動出来ない環境の人がいるが、そんな人は一応除いておくことにしたい」と彼は人選の標準について賛成を求めた。これにも私は異論はなかった。三井利員と田中喜一郎の名が出た。私は賛成した。その時迄この二人が二見らの秘密グループに加わっていたことは知らなかった。私は梅本や崔や伊藤の名を出した。すると彼は、組合関係の人達は、いずれ加えるとしても後にしたい。その人達はそれぞれ仕事があるのだから、と言った。

その時は気がつかなかったが、後に考えると、二見の意図していたのはその頃二見がつくっていた秘密グループの拡大か、別のテロリスト集団であったらしいと思えるのである。

私は彼が寺尾の名を口にしないのが不思議だった（彼も二見のグループの一員であった）。

彼と寺尾とは前に一緒に仕事をした同志であつたし、この前会った時も一緒にいたからである。
（註13）

「寺尾には話したのか」と訊ねると、「まだ話していない」と言うのである。

「君は寺尾の家にいるのだから、君が何をしようとしているか寺尾が感付いているのじゃないか。話してみたら」と言うと「じゃあ話してみよう」と言った。

とにかく植村、入江、寺尾、田中、三井と彼と私の七名でまず集まって話し合うことにきめた。場所は植村の家がいいと言う。「此処（私の家）はまだ誰も知らないから、知らさない方が

いい」と彼が言ったのである。

きめた時間に植村の家へ行くと、七人が顔を揃えた。話をはじめようと思っていると、突然岡本潤が顔を出した。彼は珍しい顔ぶれの集まりを不思議そうに見廻していたが、気まずい空気を察してか、

「植村が来いと言うから何だかわからなかったが来てみたが、何の会合かね」と誰にきくともなく言った。

「いや、別に会合じゃないんだ。植村君のところへ行ってみようと言って来ただけだよ。元気かね」と二見が答えた。それからみんなで雑談をして別れた。帰り道で入江がひどくいきまいて、約束を守らないで勝手なことをするようでは駄目だと怒った。

翌日、二見が訪ねて来て、どうすると言うので、場所を変えてもう一度集まろうと言うと、じやあそうしようということになった。

「三井と田中は別にやって貰いたいことがあるから、除いて五人で集まることにしたらどうだろう」と彼が言いだしたので、私は別にやって貰いたい仕事とは何かと聞かずに賛成した。私たちは、各自のしていることをお互いに訊ね合わない習慣だった。場所は植村の家が使えないようになったから、私の住居を使うことにきめた。

会合の日は十二月のはじめときまった。日は何日か今は記憶にない。夕方の五時に五人が集ま

った。協議にはいる前に、植村は前回の失敗を素直に認めた。入江は「了解、了解」と言って笑った。そして「約束したことは必ず守ることにしようじゃないか」と言った。岡本は妻子がいるからという理由だけで除いたのだから、いずれは加わって貰おうということになって、全員は了解した。

二見は協議にはいる前に、提案したいことがあると言って、次のことに全員の賛成を求めた。時間厳守。会合には必ず出席すること。決定したことは必ず実行すること。勝手に変更してはならない。他言無用、即ち、この会合で話し合ったことは絶対に洩らさないこと。自由な発言の保証、いいかえるとこの会合は従来アナキストが自明な事としていた原則に対しても社会革命の遂行という観点から再検討することにしたから、従来のアナキストの観点からは逸脱と思われる発言があるかもわからないから、その発言内容を他の場所で発表して、発言者を批判したり、非難したりしないこと、ということであった。全員はこれに賛成した。

さていよいよ協議にはいったのであるが、協議の主題をきめるために、二見が問題を提起した。要約すると次の通りであった。

従来アナキストは民衆の自治能力を過大に評価していたと思う。だから民衆の自治能力を阻害している諸条件を取り除けば、直ちに理想社会が実現すると主張して来た。しかし民衆に自治能力はたしかにあるが、それと同時に数千年来、権力によって抑圧された世界に生れ、そして死ん

でいったという歴史、その世界しか知らないということ、このことが凡ゆる変革、革命に対して保守性を生みだしている。この方が日常生活にとっては安全だからだ。われわれが身を挺して立ち上がり、権力の根幹をゆすぶれば、民衆の不満は爆発するだろう。われわれは民衆を啓蒙し、自覚を待つてはおられない。われわれは凡ゆる手段を尽くして、経済生活を混乱させて、革命的気運を盛り上げるために戦うべきだ。

一度革命が勃発すれば、民衆は非権力的な自治的な創造的な活動をすることは過去の革命の歴史が教えている。だが彼らは破壊から建設に移る時、彼らは再び代表を選出して総てを代表にまかして自分の生活にもどって行く。そこに権力主義者の時代がはじまる。それ故、権力主義者に権力を把握させないためにアナキストが社会のヘゲモニーを握らなくてはならぬ。

このためにまずアナキストの戦闘組織を作る必要がある。それは秘密結社でなくてはならない。戦闘には指揮者を必要とするように、中央の指導部を持った組織でなくてはならない。縦の連絡だけあって横の連絡のない組織、即ち中央集権組織を採用すべきだ。

植村はこの二見の提案に対して難色を示した。直接行動のための団体、また秘密結社であるという事情から、中央集権制を採用することには必ずしも反対ではない。従来われわれがやっていたようなルーズな運動上の態度、例えば討論の末結論が出ても、実行はしない者が出たりするというようなことは改めるべきであるが、この組織原則はわれわれの自律原則であって他の団体や大衆

団体にまでこれを強制すべきではないと主張した。二見も他の団体にまで強制する心算はないという事になって、意見は一致した。

次にこの団体の加入条件の協議にはいった。職業的革命家の団体でなくてはならないという意見に一致した。それは生活の総てを革命のために規制し得る人間でなくてはならない。そのため家庭を持っている人は原則として除外することにしたのである。またこの団体の決定事項は、事の如何を問わず、自分の意見は反対であろうとも、直ちに実行することを確認した人でなくてはならない。これらのことを決めてから、団体の名称の問題に移った。

各人はいろいろな名称を提案したが結局、私の提案した『日本無政府共産主義者連盟』と決定した。続いて連盟の機関として、中央委員会を置くことにして、五名全員が中央委員となることにきめた。将来、連盟の組織が拡大したあかつきには、大会を開いて中央委員を選出することを確認したが、取りあえずは発起した者が中央委員となって活動をはじめべきだという意見に全員賛成したのであった。中央委員会はその仕事を分担するために、政治部、組織部、労農部、文化部、国際部、軍事部、資金部と書記局を置いて、各人が二つの部を兼務することで補充した。各部の責任者に「長」という名称を主張した者もいたが、多数は「長」という名称を嫌悪して反対したので、「責任者」を正式の名称ときめた。

労農部国際部責任者 相沢尚夫

組織部責任者 入江 汎

資金部軍事部責任者 二見敏雄

書記局責任者 寺尾 実

ときめた。

この会合は午後五時から夜半に及んだ。終電車の時間が来たので、散会したのである。討論はスムーズではなかった。各人は自己の主張を簡単には譲ろうとしなかったが、革命団体をつくらねば運動を盛り上げることが出来ないという点では一致していたので、討論のうちに結論が導き出されたのであった。

六 活動計画

連盟の発足は僅かに五名であった。しかしわれわれはこの連盟が拡大され、強化され、アナキズム運動の中核になる、いやそうならない限りアナキズム運動の拡大発展はあり得ないとの意気に燃えていた。燃えあがる意気に酔っていたのかもしれないが、とにかくそう確信していた。しかし如何に意気に燃えようとも持っている物質的な力は何もなかった。

中央集権組織を採用したことは、多くのアナキストに反対されるだろうと予想した。だが、それらの反対論を、われわれは克服することが出来ると固く信じていた。また革命の暁にアナキストが社会のヘゲモニーを把握するというわれわれの方針にも、より以上の反対論が現われるであろうことも予想にたかくなかった。彼らはわれわれの主張を、誤謬、逸脱、異端、はてはボルシエヴィズムへの屈服と罵るだろう。だが総ての発展は異端のなから生れたものではなかったか。

ロシア革命前に書かれたクロボトキンの思想には正しいものが多く含まれてはいても、ロシア革命の経験による修正を加える必要がある。少なくとも、ロシア革命に於いてアナキストは敗北し、革命によって生れたソヴェト連邦をスターリン主義的国家資本主義であるとわれわれは批判はするが、歴史上はじめてブルジョアジーの支配を打倒した、その意味で社会主義を実現させた国家が生れたという現実にはゆかないのである。マルクス主義は総て反対という態度は棄てて、マルクスの資本主義批判には聴くべき点が多々あるし、要は最も速やかな方法で、国家権力を廃棄するには如何に戦うべきかを検討すべきであろう。だがわれわれは未だこれらの点について理論を構成していなかった。思想はあったが、理論はなかったのである。

連盟は週一回中央委員会を開いて、各自がそれぞれの分野で活動した事項を報告しあい、それに基づいて活動方針を検討していた。最初にとりあげた問題は、当時進行中だった自連と自協との合同問題であった。この問題は両者が互いに機関決定をしていたので合同は時間の問題ではあ

ったが、一部に感情的なシコリが残っていて、それが進行を停滞させていた。連盟は速やかな合同が必要だから、そのために必要な協力はおしまないときめて、私に一任することをきめた。私は金沢末松が反対していると聞いていたので、彼に会って、懇談した。その時には彼は自説を固執しないと言っていたので、この問題は解決したものと思ったが、それから相当時間がかかって、一九三四年一月日本自協の全国自連への復帰的解消という形で落着いたのである。感情的シコリとは組合分裂当時、乱闘騒ぎがあったが、その時彼はひどく撲られたので、自分を撲った連中と一緒に仕事をするのは厭だということだった。

連盟の重要な案件は、資金問題だった。連盟の最初の資金は、私が学生時代の友人から寄附してもらった二〇〇円の金だけだった。しかしこの金はたちまちなくなってしまった。二見が投機に使って失敗してしまったのである。

二見は常に資金問題の解決が総てに優先すべきだと主張していた。資金がなければ、何も出来ないことは明らかなことだから、資金問題の解決は誰も反対しなかった。だが、それだけを最優先すべきだという主張には、すぐには承服出来ないものがあつた。入江は、資金問題は資金部が全責任を以って調達して、われわれに回してくるのが本筋だと主張して全員で資金問題に取り組みたいという二見の要請に反対した。だが二見も譲らない。どんな素晴らしい計画を立てようとも、資金がなければ机上の計画に過ぎない。計画なら自分も持っている。この計画は充分に検討

して貰いたい、それより先に資金を獲得することだと強調した。結局、資金部があるのだから、資金部が資金を調達する計画を立てて、われわれはそれに出来る限り協力するときにめた。二見は反対しなかったらよかったが、承服した。

資金問題は後に述べることにして、二見の計画案を述べておくことにしたい。この計画案は、中央委員会で検討した上で、アナキズム運動の各分野の代表と見なされる人物を集めて研究会を開いて、検討することにした。その内容は二見がこれまでに主張して来た意見を図表としてまとめたものであつた。私はこの図表の原本を持っている訳ではなく、ここに書くのは昭和十一年一月に文部省思想局が発行した極秘扱の彙報第四十一輯の写しからとつたのである。文部省の発行した文書の原本が、二見が中委に提出したものによつたものか、あるいは彼が逮捕後の取調べの際に手記したものかは、さだかではない。けれどもこれが二見が書いたものに依拠していることは間違いないと思つている。何故なら、この図表のなかに二見だけが好んでもちいていた表現があるからであつて、彼以外は誰もその言葉は使わなかった。それは『根本主義』という言葉である。彼はこの言葉を、合法的出版物のなかでは、まわりくどい表現を使う、例えば天皇制打倒とは言わないで、絶対主義打倒という風に表現するが、非合法出版物では、あからさまな表現をするという意味も含めて、革命に際してはアナキストが社会のヘゲモニーを把握するというわれわれの思想を根本主義と言つていたのである。それ故、私は文部省発行の文書のなかから、この図

表を次に転記して置く。

組織行動計画書(一)

無政府共産主義運動の実践論(活動分野戦略の部)

合法運動

組合運動

(一) 組合(自連系)結成(工場労働者組合。サラリーマン組合。農業労働者組合。一般使用人組合)

(二) 中間組合の破壊

(三) 組合員獲得の一般宣伝(機関紙発行。雑誌パンフレット発行。座談会研究会開催。演説会開催。労働学校開設)

(四) 争議の敢行

文化運動

(一) 文化団体結成(演芸グループ結成。作家グループ結成。学生グループ結成。其他各種研究団体結成)

(二) 宣伝行動としての出版事業(各種団体機関紙発行。大衆雑誌発行。パンフレット発行。単

行本発行)

(三) 社会的各種集会開催

思想運動

(一) アナキズムの科学的研究発表

(二) 他主義の批判解剖発表

(三) 現在社会の矛盾の理論的攻撃

資金運動

(一) 資金網の確立

(二) 利益事業の経営

非合法運動

宣伝運動

(一) 出版物宣伝(根本主義機関紙発行。雑誌発行。パンフレット発行)

(二) 各種秘密研究会座談会開催

(三) 各種組合及団体潜入煽動

直接行動運動(武力運動)

(一) 武器獲得及研究

- (一) 個人テロ敢行（社会情勢を不安に導く方法として）
 - (二) 集団テロ敢行（社会変革の導火線として）
 - (四) 争議（各種）の武力的応援
 - (五) 社会的暴動事件の武力的援助
 - (六) 非合法運動犠牲者の救出
- 資金運動
- (一) シンパ網結成
 - (二) 合法的利益事業の経営
 - (三) 強奪

組織行動計画書（二）

資本主義経済組織の破壊運動（終極に於ける革命運動の目標）

第一次 行動目標

- 一 資金の充実
- 二 革命団体の実力充実
- 三 無政府主義諸団体（合法を含む）の拡大強化

第二次 行動目標

- 一 一般民衆の啓蒙運動
 - 二 一般大衆の組織結成拡大
- #### 第三次 行動目標

- 一 資本主義経済機構の破壊（偽造紙幣の発行。登記所（全国）の書類焼却。全国税務所の書類焼却。全国市町村役場の書類焼却）
- 二 現代政治機構の爆撃（帝都襲撃。至上権力の破壊。議会襲撃。通信運輸機関の全国的破壊）

このために印刷、製紙、運輸、倉庫業を経営し大量の紙幣を印刷すると共に、各種必要な調査を行なう待機する。^(注14)

中央委員会はこの計画書をそのまま承認しなかった。なお研究が必要だと考えたのである。とくに入江と私とは、二見が第三次はともかくとして第一次、第二次と行動計画を分けたことに反対した。便宜上分類したのならいいとしても時間的経過を考えているのなら、それは誤りだと主張した。二見の意見によれば、まず資金を充実させてから、宣伝活動も組織活動もはじめるべきであって、連盟員の獲得もそれまではしない方がいいというのであったが、入江と私とは資金活動は宣伝活動、組織活動と並行して行なうべきだと主張したのである。しかしこの主張は二見に

は公式論だと思えたのである。

「三対一じゃ仕方がないね。しかし資金獲得は自分が責任を持つが、みんなも協力してくれなくては困る」と彼が言った。そして全員は協力することになった。

偽造紙幣の大量発行によって経済界を混乱させるという二見の計画は、これが実行出来る時は、われわれの力が強大になった時であり、われわれの力が強大になるのは、大衆運動が盛り上がり、革命的気運が高まった時だと思われるから、偽造紙幣は経済界を混乱させる前に、われわれの活動資金として使用されるのではないか、という意見が出て、なお研究することになった。^(注15)